

ペルソナ 神器になっ  
た少年

織田

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

桐条鴻悦の実験で生まれることになった「神器」の少年が存在し介入する  
初投稿です

投下はかなりのんびりだと思えます。

# 目次

全ての始まり

プロローグ

一話 時を操る神器

二話 木下ヒカル

三話 実験風景

四話 二〇〇〇年九月

五話 ショウタの力

六話 「アス」

七話 別れ

八話 「荒ぶる神」

九話 始まりのエピローグ

設定集

57 52 47 42 36 29 22 17 11 5 1

ストレガ編

十話 次へのプロローグ

十一話 再び地獄へ

十二話 ストレガにおける日常

75

十三話 ストレガの面々

81

61

68



# 全ての始まり

## プロローグ

シャドウとは無意識の表層に存在する人間の負の部分が制御できない怪物として現れたものである。シャドウが糧とする人間の負の部分としては、例えば七つの大罪に挙げられる。「暴食」、「色欲」、「強欲」、「憤怒」、「怠惰」、「傲慢」、「嫉妬」など人を罪に導く感情である。これらの感情は意識的に制御しがたいものであり、当然のことながらシャドウの力を自由自在に操るということは容易なことではない。

だがその禁忌の力に魅せられた男がいた。無貌なる神から貶められた哀れな男である。桐条鴻悦という男であった。自分の経営する会社を世界的な大企業とするまでに天才的経営センスを背景にしつつも必死に働き続けて、心を富と名誉など人から羨む称号を得る事で自分の心を満たした。がその結果、心が完全に満たされるわけではなく自分の生きる目的を失ってしまった。

そんな無為の日々を過ごす折に、「偶然」に黄昏の羽とシャドウを入手してシャドウの存在を知った。時間を、空間を操ることのできる神の如き力を手に入れられると男は、新たな生きる目的を見つけた。これで自分の心の空白を埋めてくれる。自分の輝かし

い功績にまた新たな一ページが加わるのだと、今まで成功を収めてきた男は当然のように自分の成功を盲信し実験を開始して、・・・あえなく失敗した。

「ぎやあああああ ■■■■■■■■■■■■■■」

「被験者がシャドウに飲み込まれていきます。制御不可です。すぐに鎮圧してください」

目の前の光景はその輝かしい成功とはかけ離れたモノであった。人が、人の命が無残に散っていく。研究員が慌てて被験者のもとに駆け付けるも被験者は黒い霧のようなものに飲み込まれていくだけである。目の前の光景は男にとって許しがたいものであった。別に目の前の人の命が失われていくことに対して、悲しんでるわけではない。ただ自分にとって汚点となるもしくは破滅する実験結果となることが許しがたいだけである。もし自分が人を実験で殺したという汚点を多くの人々が知ってしまったら、失われてしまう。これまで築いてきた名誉が、富が、それだけは絶対に避けなければならない。富と名誉で心を満たした男は、他者を通じての繋がりを疎かにしていた。

だからこそ、この無貌なる神から目を付けられた。

「実験は失敗ですね。ゴ(当主)」

男に話し掛けるのは、黄金の羽やシャドウを男に持ち込んできたメガネを掛けたどこにでもいるような研究員であった。

「失敗？…失敗だと。貴様どの口でそんな事を言うつもりだ。この実験は他でもない貴様がこの実験を勧めたのだから、この事が世間にしれてみる。ワシは破滅だ」

男は研究員の襟首を掴み顔を赤く憤怒に変えながら凄んだ。

「貴様のせいだ、貴様がこの実験を勧めたのだ。責任は貴様がとるのだ」

「責任？…何を言っているのです。そんなもの取らなければよいじゃないですか。今我々がしているのは時間と空間を操る神の力を操る実験ですよ。この程度の犠牲些細なことじゃないですか」

悪びれた様子もなく研究員は男に応じる。その顔にはまるで罪悪感はない。

「シャドウを操る力さえ手に入れば全ては思いのままです。問題なんて存在しませんよ」

「…この事が暴露されればワシは破滅してしまうのだぞ」

「ここにいる皆は同罪ですよ。多くの人の命を奪ったという意味でね。だから裏切り者がでないようにしないとけませんね。そうすれば何の問題もありません」

「…絶対に成功させるのだな」

「それはモチロンです」

研究員はよどみない口調で嘘を吐く。まるで信賴の存在を全く信じていないように嘘を吐くのだ。

「……なら良い。研究員に今の実験を続けさせる。絶対にばれない様に共犯者にしてな。ワシの富や名誉が失われるぐらいなら……」

「世界が終ってしまった方が良い……ですか」

男の狂気に染まった眩気に続ける形で研究員は言葉を続ける。男はジロリと研究員にただ視線を投げかけるも無言のまま踵を返してその場から立ち去っていく。研究員は最後の狂気の意味を吟味すると、口を邪悪としか言えないほどに歪める。

（フツハハハハハハハハハッ、ハハハハハハハハハ。素晴らしい狂気だ。後は適当にシャドウの知識を授けてやれば勝手に行動する事だろう。後は傍観者として行動させてもらうとするか。せいぜいこの『這いよる混沌（ニヤルラトホテプ）』を楽しませてくれよ）

無貌なる神から弄ばれた男は自分の空虚を埋めるために行つた実験から、歪み始めどうしようもないほどに堕ちはじめる。世界の破滅という道を開くまでに。

また同時に『這いよる混沌（ニヤルラトホテプ）』すらも計算外となつたことが唯一つあるとしたら。

実験の中で「神器」となる少年を生み出してしまったことだろう。



## 一話 時を操る神器

シャドウの力を元にした「時を操る神器」を作るに当たって実験のアプローチとしては二つのアプローチが当初より考案されていた。

まず一つ目は純粹にシャドウそのものを集めて研究するという方法だ。シャドウの特徴を科学的に分析することで、制御方法も見つかるとは考えないかと考えたアプローチの仕方ではエルゴ研究所にいる大半の研究員は、その部署に所属していた。岳羽詠一朗など優秀な研究員を外部からスカウトしてきて、大半の研究員が所属する。シャドウの力を操るに当たってシャドウそのものを操るといふ考え方は考案されていたアプローチの中では主流とされていた。所謂、メインともいえる部門であった。エルゴ研究所の第一部門である。

多くの研究者はシャドウという未知なる力に魅せられやりのある仕事だとして没頭した。実際この部門では桐条鴻悦に近い立場のある「研究者」のおかげで多大な成果を残すことに成功している。ある「研究者」は研究者にシャドウに関する知識を与え、明らかに20世紀の科学ではオーバートクノロジーではないかと思えるような人型対シャドウ戦闘機を完成させることに成功するなど人知の及ばないはずの領域に到達さ

せたのだ。そのある「研究者」の業績をまるで神のようだ、人知を超えた存在だと研究者がその「研究者」を尊敬し「研究者」に近づこうとしたのも無理はないだろう。まあ大半の研究者はそれで堕ちてしまうのだが。

「ぐああああああ、あああああ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」

「ぎゃあああああ、あああああ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」

「やめて、痛い痛い、イタああああ ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」

そして二つ目のアプローチとして考えられた方法とはシャドウを人の体を通して操ろうという実験である。シャドウとは人間の集合体無意識の負の部分が制御を離れてしまうことで現れた怪物である。未来のアイギス妹曰く「自分の暗部を見つめる力がゼロになった時、制御を離れて外へ迷い出る」ものである。言うなれば人間の一部分である為、人間の体を通すことでシャドウの力を操ることができないかという考えのもと始められた実験であった。エルゴ研究所の第二部門で行われている。

実際自分の無意識の負の部分であるシャドウを操るものはペルソナ使いと呼ばれて、実際に存在する。その為ペルソナ使いとしてシャドウと同じ力を操らせるというアプローチの仕方は人道的見地からは間違えているとしか言いようがないが、方法としては間違っていない。

ただある「研究者」が勧めた実験というのが問題ではある。自分のシャドウを制御さ

せることによりペルソナ使いとして覚醒させる実験なら成功の見込みもあるだろう。ただ集めた他人のシャドウを人間に植えつけさせることを通してシャドウを制御させる実験ならどうであろうか。他者の負の部分の部分を植えつけられ自分の力に変えることはハッキリ言つて無理どころではない。絶対に失敗する実験である。実際桐条鴻悦の立ち会つた第一回目の実験では死者を多数だし失敗に終わった。研究者達も実際この実験は成功率の低いものとして見なしていて当初の目的とは違うもう一つの目的が存在する。

「もうやめて、この実験は失敗よ。こんな事許されるわけないわ」

涙ながらに若い女研究員は嘆願する。今日初めて実験に参加することになり、被験者に対してシャドウを植えつける作業を行った女性である。被験者に対して実験前に気軽に話しかけて安心させている分優しい性分なのだろう。ただ周りの研究員は無表情で佇むだけである。

「皆、早く実験をやめないと」

「君が殺したことになるね」

「・・・!?!」

一人の研究員が口を開いたにつれて、他の研究員も徐々に口を開いていく。

「まさか自分は悪いことをしていないとでもいうのかい」

「今日の実験でシャドウを植えつけさせたのは君だぜ」

「何が許されないんだい。君の行為だよ。目を背けるなよ」

「被験者を苦しめているのは君だ」

「人殺し」

「偽善者だね」

「!?私はそんなこと・・・」

他の研究員は畳みかけるように言葉を重ねる。女研究員は重ねられた言葉に青ざめた顔になりながら声をつもらせる。

「まあ君がどうこの事を捉えるかどうかはどうでもいいさ」

「君がどう思おうとほら」

他の研究員達は心底どうでも良いといった風に扱い、ただ機械が告げる結果を示す。

「ピ—————ピ—————」

「!?」

無情な電子音を示すのは心肺停止の証だった。自分が殺してしまったという事実の顔を青ざめる。

「そんな・・・」

「まあこれで君も」

「共犯だね」

そしてもう一つの目的が所謂踏み絵というような研究員の共犯としての罪の囲い込みであった。優秀な研究者を危険な実験に関わらせるには、情報漏洩の危険が伴う。それを防止させるために引きずり込むというのが、もう一つの目的である。シャドウに飲み込まれる過程を観察するという実験を同時にこなすことができるというのが利点でもある。通常この実験に関わって生きている人など存在しない。その為この女研究員も完全な絶望の中に沈んでしまうのが、現実であるはずだったが。

「わああああああん、わああああああん」

「[[[[:]]]]」

小さな少年の声が電子音の鳴り響く研究室の中響いた。女研究員はすぐさま唯一の生存者の男の子のところまで走っていく。他の被験者と違い黒い霧に包まれてシャドウに食われてしまう様子もない。

「馬鹿な生存者だと、これまで生きていたものなど・・・」

女研究員は少年を抱き占める。生きていてくれたことに。偽善であったとしても生きていたことを喜んで。

「・・・対象が幼すぎた為シャドウを取り込んでしまったのか、だがしかし、それだとかかなりの適正をもつことになるな、木下ヒカル。その少年は貴重なサンプルだ。だか

ら・・・」

「この子は私が面倒見ます！」

女研究員いやヒカルは涙目になりながらも声を張り上げる。

「あなた達は私の能力が欲しくてこんな事をしたんでしょ。研究には参加するからこの子には手をださないで」

「・・・フンまあいい。これからは働いて貰いますよ木下先生」

研究員達は無表情なまま今の実験で取れたデータに興味を映した。目に確かな狂気を宿しながら。

その出会いが木下ヒカルと「神器」となる少年の初めての出会いでした。

## 二話 木下ヒカル

木下ヒカル。

有名大学を主席で卒業して未来を約束された彼女であり、その能力を高く買われ桐条グループに就職。その後、能力を買われた彼女はシャドウという未知の力に関する研究を勧める為に、危険な実験に関与させられて、暗部に属するエルゴ研究所第二部門への転勤を余儀なくされた。絶望の未来に墮ちる彼女であったが、当面の問題は子育てであった。

「こうしてAさんはB男さんの愛を勝ち取るのです。めでたし、めでたし」

「・・・ヒカルう」

ヒカルと呼ばれたメガネを掛けた女性は、少年に本を読んで挙げていた。先日の実験で生き残った自分の罪の象徴ともいえるであろう少年を研究所内で引き取る事になり子育てをすることになったのだ。4歳くらいの少年の面倒を見ることになった彼女であるが、子育ての経験の無い彼女は手探りで試みるしかない為まずは情操教育の一環として本を読んであげることにした。

「どうしたの？ちよつと話難しかったかな」

ヒカルは少し苦笑しながらも優し気な顔で少年に笑いかける。その顔の表情はしよ  
うがないなあ、といたげな顔である。

「うん。えつとね、まずAさんがけっこんしたのは」

「C子ね」

「B男のせいべつって」

「男に決まってるじゃない」

「.....」

訂正すると彼女の教育にかなり問題があるようだった。

「.....じゃあ、あいつてなに？」

「愛つてのはね。例え性別を越えていようと、年齢が違っていようと関係ないパトスよ、  
パトス」

「じゃあ、ヒカルはぼくのことあいしてる？」

「それはない」

「.....」

無垢な少年の思いを真顔で一刀両断する当たり、彼女の正直さが表れている気がす  
る。でもあえていうなら天然外道であるこの女。

「大体考えて見てよ。別に君のことが嫌いってわけじゃないけど、それでも会って8日



しかないシヨタを愛してるとはいえないよ。愛つてのはねそんな軽い言葉じゃないの」「シヨタ?」

「そ、君の事」

「ぼくのなまえ?」

「え?」

「え?」

ヒカルはシヨタを小さい男の子という意味で採用したのだが、少年は自分の名前をシヨウタとして呼ばれていると誤解したのだときずく。同時に少年に名前がなく他の研究員からは特異点である25号としか認識されていないことを。

ヒカルにとって少年は自分の罪であり、始めはただの罪悪感からの責任それだけだった。けれど悪意や狂気に満ちた研究所内の生活のなかで、少年と気楽に過ごす時間は8日しかたつていないにも関わらず貴重なものになっていったのだ。ヒカル自身の優しい性分から少年との触れ合いは気持ちが悪く動いてしまうのに十分なものでした。だが、問題があつた。

(馴れ合うつもりは、あまり無かつただけだなあ)

少年はエルゴ研究所第二部門において唯一シャドウを体内に取り込ませることのできる成功例として注目されていた。いくらヒカルが優秀な科学者で手を出さないでと

嘆願していても、所詮一人の科学者に過ぎず限度があるのだ。肩入れしすぎてしまうとヒカル自身が危ない。その為か今まで君としか呼んでなかった気がする。だからといって他の研究員と同じく25号なんて呼ぶのも躊躇われる。名前を付けてしまえば確実に自分にとって特別な存在なるだろう。馴れ合うことは破滅に進んでしまうというのに。

「ヒカル？」

不思議そうな顔で自分の顔を見る少年を見るとその絆を断ち切りたくないという気持ちになる。決して自分はシヨタではないが。

「・・・しようがないなあ。うん君の名前はシヨウタだ。私が決めたよ、ありがたく頂戴しなさい」

「シヨウタ・・・。うん、ぼくのなまえだよ」

微笑ましい二人のやり取りの中、少年は自分の名前が付いたことに喜び手を振り、全身で表現する。ただ、自分の名前がシヨタという小さい男の子を愛する嗜好から勘違いでついたという事実さえなければ完全にいい話だろう。そんな微笑ましい時間も空気を読めない声で終わる。

「25号！時間だ。さっさと準備をしろ」

研究員がヒカルの私室にノックもせずに入ってきた。シャドウを少年の体内に取り

込ませる実験をするつもりなのだろう。大量のシャドウを少年に取り込ませることを通じて、少年を「神器」に仕立て上げるつもりなのだ。少年は他の被験者と違い一番幼いことから十分なペルソナが形成されていない。それでもシャドウという負の力を少年が取り込むことのできる理由として、挙げられるものとしてはペルソナ使いとしての高い適正という先天的な才能、そしてもう一つ後天的な才能として少年が他者と優れている点として挙げられるのが、驚くほどの精神性である。

「じゃあ、ヒカルまた遊んでね」

シヨウタは実験で苦痛を伴い死ぬかもしれないという事を理解しながら研究員のそばにいく。戦争がある国で生まれた子供と平和な国で生まれた国の価値観は違う。例えば、今の平和とされる日本の中で国の為戦うなどという大和魂を持った若者がどれだけいるだろうか。平和というぬるま湯につきり多くの若者は怠惰や傲慢に占められ、覚悟の持たないものが大半のはずだ。

ならばシヨウタはどうだろうか、多分死ぬことが恐怖であることは知っている。明日死ぬかもしれないという状況で他の実験体と共に生活して死ぬという意味を理解しているはずだ。ただ物心つくころから、人間の負の部分を知り、死ぬかもしれない状況に置かれたシヨウタの精神性は多分ヒカルのものとは大分違うはずだ。

(多分負の部分を知りながら持ちえないのは、優しさを知らないからだ)

ヒカルはシヨウタを憐れみつつも覚悟を決める。

「ほら木下、さっさと準備にかかれ」

「……分かつているわよ」

自分の役割はシヨウタが死なないように実験の調整をすることだ。実験を成功させることがシヨウタを生き延びさせることに繋がるのなら今の困難ぐらい乗り越えて見せる。結果ヒカルは実験に自分の能力を費やすことになる。「神器」を完成させる為ではなくシヨウタを生き延びさせる為に前を向いて生きてほしい為に。

シヨウタとヒカルの時間は実験の些細な合間にとられ、二人にとって掛け替えのない大切な時間となっていた。

けれど事態は急変していく桐条鴻悦を唆した「研究者」が彼のもとから急遽行方をくらまかけたのだ。第一部門、第二部門ともに「神器」の完成がまだ未完成である状態に残したまま。優秀な「研究者」を失い「神器」の完成がほぼ不可能と断定されるようになる。狂気に飲み込まれていた桐条鴻悦や研究者達は、世界への破壊を願うようになる。自分達の犯した罪を直視できないが故に世界を終わらせることで解決しようとしたのだ。

## 三話 実験風景

デスの降臨とそれに伴うニユクスの顕現。其れがエルゴ研究所の目的となつたのはいつからだろうか。シャドウの偉大な力に魅せられた研究員は等しく思うようになった。シャドウの力を限界まで調べたい、偉大な力を示したい。例え、世界を滅ぼすこととなつたとしても。

一九九八年 ある「研究員」が桐条鴻悦のもとを去つたことをきっかけに、狂気は研究所全体に及ぶようになり、シャドウの単なる力の利用から「滅びの将来」へと移行することになる。

「二五号！実験開始だ」

頑強に施錠された密室で、『シャドウ』と呼ばれる怪物が死の運命を伴つて、5歳になつて間もない少年に眼前から迫り来る。『シャドウ』の力を人間という体を通して発現させた力であるペルソナ能力を初めて顕現させた少年であるシヨウタは貴重なサンプルとして、酷使されていた。ペルソナ能力の顕現を可能とするためには生命の危機という極限状態に追い込む必要がある。その為、『シャドウ』と同じ密室に入れることでペルソナを出させる実験をおこなうのだ。だが、ペルソナの発現はなく、迫り来るシャド

ウの魔の手から逃げ続けることが精一杯であった。

「ハア、ハア、フー」

「GYAA ■■■」

ペルソナ能力の顕現には幾つか条件がある一つ目は適正能力、二つ目は影時間のような特殊な空間、そして三つ目に必要とされるのが死を受け入れる程の覚悟である。一つ目や二つ目は現時点でもクリアしているが、三つ目の覚悟は難しい。将来ペルソナ使いが大量に量産されることになるのだが、彼らは召喚機を通して擬似的な死を経験させる方法でペルソナを召喚しているのである。言うなれば自転車の補助輪が付いているか、付いていないかという問題が例として挙げられる。ただその自転車がとんでもなく乗るのが難しい自転車であるという違いを除いては例として正しいだろう。

「いい見世物じゃな。目がまだ死んでおらぬようじゃ。美鶴より年下のはずじゃが大した精神力よ」

貴賓室でモニターを見ているのは桐条鴻悦。最近楽しみな娯楽として二五号と少年の戦いを見学している。感心する口調とは相反する獰猛な顔からは狂気がにじみ出ている。嗜虐心をくすぐる遊びなのだ、この少年を精神の極限状態に追い込むという実験は。ペルソナ能力が精神を根源とする力であることを考えた研究者達は、実験体の精神を追い込むことでペルソナ能力を発現させるといふ実験を繰り返していたのだ。密室

に捕獲したシャドウと薬物投与した実験体を閉じ込め、覚醒を促す。そんな作業が繰り返され多くの命が散る。

「う、ペ・る・そ・な!!!」

だがそんな極限状態に行われる実験で生き残っているのが二五号ことシヨウタだった。

今回顕現したペルソナはイザナギである。黒い仮面ライダーのような形をしたペルソナが顕現する。そして顕現したペルソナは瞬く間に少年を襲っていたシャドウを蹴散らして消える。同時に少年も崩れ落ちるかにように倒れた。

「今のがイザナギか、他にもペルソナを有しているとは本当か」

「はい、我々が目指しているニユクスの顕現に必要な12のアルカナのシャドウを体内に取り込ませることにより擬似的にデスを体内に取り込んでいるのと同じ状態です。その為死を内包することで強力なペルソナ能力をふるう精神力が向上されていると考えられています」

桐条鴻悦は少年が生き残ったという事に対してなんら感傷を見せることなく隣にいる研究員に尋ねる。

「フン、ペルソナを多数内包したものの「ワイルド」か、我々が目指していた「神器」にはできないのか」

「無理でしょう。実験体の生命力が著しく消耗しているので、寿命も短くなっていますね」

少年の命を気に掛けるような研究員などここには一人を除いては誰もいないだろう。その一人である木下ヒカルは桐条鴻悦や研究員が交わす会話に冷ややかな視線を見せつつも、一つの覚悟を決める。このままでは世界が減んでしまう。

ならば、せめてこの子だけでも生き残る方法を与えよう。例え自分自身が死ぬことになつたとしても……。木下は自分の大学の先輩で気弱そうな主任研究員の岳羽詠一郎と連絡をとることを決める何をすべきなのかについて。

それから時は過ぎ屋久島のエルゴ研究所で五式ラピリスや七式アイギスのような対シヤドウ戦闘機が非人道的な実験の元開発するようになり、ヒカルやシヨウタも実験は関与させられる日々が過ぎた。

終わりは必ず訪れる。

目を塞いでいても。

耳を閉じていても。



世界の破滅という、どうしようもないほど堕ちた道をいく人々の中で運命に逆らおうとする人々が現れ破滅は一時的には防がれることになるのだが、代償は大きく残ることになる。

代償としてタルタロスが残る。同時にエルゴ研究所内で「神器」となる少年以外生き残った者は誰もいないことになる。

## 四話 二〇〇〇年九月

最初に感じたの温もりだった。ヒカルと初めて会った時、初めて抱きしめられた。泣いていた。涙を流してくれた。それから分かったのは一つ。

ただ生きていてくれるだけで喜んでくれた。

それがどうしようもないほど嬉しかった。

辛い実験で命の危険に晒される毎日でも自分にとってヒカルとの日々は貴重な時間だと覚えている。明日死ぬかもしれないから今日という日を大事に生きようとした。

けれど、終わりは必ずやってくる。

二〇〇〇年九月

滅びの将来を目的とした最終段階の実験が実施されることになり、影時間の連日化、タルタロスの出現などが発生することになる。タルタロスとは、未来の望月綾時の言によれば「闇の夜空へとうがたれた巨大な大穴・ニユクスを導く目印」となる、所謂儀式場である。通常タルタロスを踏破するにはシャドウの群れに対して対抗できるペルソナ使いが有効ではあるし、対シャドウ戦闘機のアイギス、25号というペルソナ使いがエルゴ研究所にいた。けれどイチイチ階段を上るには手間がいるため、タルタロス出現時に昇降機に値するポータルを作ること登ろうとすることを容易にしていた。

実験では12のアルカナのシャドウを結合することで、人間の負の力を生み出す究極的、普遍的な恐怖の源である「死」を顕現させること。タルタロスとは影時間という本来交わるハズのない現実世界と人間の意識が具現化した空間を作り出し現実世界への干渉を可能にするものなのだ。

本来ニユクス自体に害意は無い。だが人々の「死」に触れてみたい、という負への思いが結合してタルタロスを通じニユクスを現実世界に導き出すのである。嘘みたいな話だが世界は破滅へとカウントダウンを始めていて、……あえなく阻止された。

「……僕は今からシャドウの結合を崩壊させるつもりだ。君はその前にあの子を連れて、できるだけ遠くに逃げてくれ」

茶髪の気の弱そうな風貌だが、覚悟を決めた表情の男性はヒカルに計画の実行を話

す。死に行く表情であるというのに、目に光があるのは自分の成すべき事を認識しているからだろう。

「けれど、岳羽先輩は？ 実験を失敗させたとなると只では済みませんよ」

「その点は問題ない。シャドウの結合には繊細な作業が必要となる。ワザと失敗させるとなると大きな爆発が起きるはずだ。ご当主も、ここにいる研究員達も、僕も、．．．誰も生き残らない。その筈だ」

「．．．．．逃げないんですか」

「．．．ああ、この実験を進めてきたのは僕たちだ。こんな実験行われるべきじゃなかった。そんなことを知っていたはずなのに」

覚悟を決めつつも、その顔には諦観と後悔が滲み出ていた。ヒカルは岳羽詠一郎に対して躊躇いながらも覚悟を問う。その顔には、僅かな反意をにじませている

「君のほうはどうだい、目途は立ったのかい。あの子を救う方法が」

「．．．多分、シヨウタの体内にシャドウがあの子の中に内包されていることに関しては、ペルソナ使いとして安定させる実験を繰り返し返したことで目途が立っています。シャドウはすでにシヨウタの力となつている為暴走の危険性もないでしょう。ただ短くなつてしまった寿命を回復させてしまうには．．．」

「．．．誰かの生命を犠牲にしなくてはならないのかな」

「……おそらく」

「……君の命を使うのはやめたほうがいい。彼には君が必要だ」

先程と逆の構図だった。岳羽詠一郎が今度は僅かな反意を示しながら覚悟を問いかける。お互い深く相手の事情に踏み込んだセリフを吐くことができないのは似た者同士だからだろう。自分の命を使って何かを成し遂げようとするものという意味で。

「無論、私自身死にたくないです。けれど、他人の生命を使ってあの子を守ったとしたら、それこそ会わせる顔がないですよ」

「……」

覚悟を決めた顔にあるのは、唯の罪悪感に起因する物事を成し遂げようという思いではない。ただ守るべきモノがいる、と示していた。

「まあ、これは最終手段ですよ。今すぐ使う方法じゃありません。シヨウタと遠くに逃げてあの子が一人で暮らしていけるようになってからですよ。それまでに寿命をどうにかする方法に関して他の方法が見つかるかもしれないし」

「……ああ、きつと見つかるさ」

場を和らげるかのように前向きな言葉をヒカルは告げる。岳羽詠一郎もヒカルの言葉に追従する形で同意する。未来があるからこそ前を向いて歩いて行ける。自分には守るべきものがあるから自分の役割を全うする。

「では、岳羽先輩。私は予定時刻にシヨウタ連れ出すことができるように準備しますね」  
「君も気を付けてくれ」

ヒカルと岳羽詠一郎。二人が研究所の一室で行った密談は世界の破滅を食い止めることになる。死に行く者の会話であった。

「うん？ ヒカルどうしたの？」

「・・・ちよとね。もう少し時間がね」

「・・・？」

いつもの様に遊びに来てくれたと思ったシヨウタは絵本を読んでもくれるのか、またどんな事をしてくれるのか、と期待に満ちた視線を投げかけていたが険しい顔つきで部屋にいるヒカルの表情に疑問を抱く。

「ところで、シヨウタ。海好き？」

「うんだいすきだよ」

「じゃあ海の近くの家に住みたい？」

「うん？ けんきゆうじよ、うつるの」

屋久島と月光学院の在るポートアイランドの二つの研究所を経験したことのあるシヨウタだったが、質問の意図を理解することが出来なかった。

「違う、違う。そうじゃなくて研究所から出て、普通に暮らしたいかいつてこと」

「えーそれつて、・・・いいの？」

幼いながらも研究所を出る事、それが自分には不可能ではないかという事を理解していたシヨウタはヒカルに問いかける。

「いいんだよ。こんな陰気くさい研究所から外に出て、・・・楽しいこと嬉しいこといっぱい教えてあげるよ」

「たのしいこと？」

「ああ、楽しいこと嬉しいこといっぱい、いっぱい教えてやる」

ヒカルは真剣な顔でシヨウタに告げる研究所を出ないかと。その上で問いかけているのだ、どうするかと。そしてその答えも決まっていた。

「・・・うん、おしえてほしいよ。ヒカル」

シヨウタは嬉しそうな顔でヒカルを見上げる。それをヒカルは笑みを浮かべながら、満足そうな顔で答える。

「研究所から出たら、たくさん教えてやるさ」

と、シヨウタとヒカルの会話が一段落した後はその事態は発生した。

——  
突如、爆発音が鳴り響いた。



## 五話 ショウタの力

其処に満ちているのは、確かな死の気配だった。

岳羽詠一郎のもとシャドウの結合は不完全な形で行われることになり、大きな爆発のもと多くの命が死んだ。

けれど、それだけではない。

それだけではない。

こんなにも死の気配を感じるのは、

「ねえ、ヒカル。なんでいまのおと、なに？」

ヒカルは爆発音が聞こえるや否や、即座にショウタを担ぎ上げて個室から全速力で走り出した。通常、貴重なサンプルとして認識されているショウタが勝手な行動を取らないように発信機となる首輪が付けられているし、廊下の監視カメラから所在が常に分かるように厳重体制をとっている。その為、ヒカルの行動は通常時なら、逃亡であることが

すぐに認識され、止められてしまうだろう。

だが、今は違う

「ハア、ハア、黙ってなさい、只でさえ、運動不足なんだから」

体を動かすより、頭脳を動かす方が得意という根っからの文科系女子であるヒカルの足はそれほど速くない。体力もない。けれど彼女を捉えようとする追手がいない。監視カメラが働いていない。研究所内の多くの研究員が、生きていないはずなのだ。

(岳羽先輩……)

爆発音が聞こえたのは、寄宿舎がある場所から一番遠いメインの実験場。事前の打ち合わせ通りに事が進んだとなると、彼は生きてはいないのだろう。彼の死を無駄にはしたくない。

ならば、自分の成すべき事を成すだけだ。

運動不足の自分の体を呪いつつ、エルゴ研究所の正面玄関につくと流石に今まで目につかなかったといえども研究員と警備員の姿が確認された。ただ救いとなっているのは、今さつき研究所に起きた爆発音やその後生じた火災に気取られて、自分達の姿を確認していないという事だろう。外に出るには正面玄関を通る必要がある為、人だかりを迂回することはできない、という訳で手札の一つを切ることにした。

「ショウタ、《悪戯(トツリクオアトリート)》を使ってあいつらと私達を入れ替われる？」

「うん?・・・だいじょうぶだよ」

ヒカルはシヨウタに小声で確認をとる。そして遠くの物陰からシヨウタを連れ出した姿で、壁を背後にしたまま堂々と姿を現し大声で呼んだ。

「おーい、コッチよ、コッチを見なさい」

ヒカルは研究員と警備員が気づくように気を引く。と、焦燥にかられている連中はその声の方角を見る。

「何だ、今忙しいんだ・・・?! 貴様どうしてそのサンプルを連れ歩いている! まさか!?!」

緊急事態に焦りを隠せない様子の研究員達はヒカルの方を見て、少年を担いでいるのを確認すると事態を把握する。少年が逃げてしまうことは、エルゴ研究所にとって大損失となりかねないのだ。この緊急事態に更なる損失は避けたいと焦りが増していく。

「まさかも何も、逃亡するに決まっているでしょ」

ヒカルはその様子を確認すると、ニヤリと挑発するように叫ぶ。と研究員達は、少年の力を知るが故に、銃を携帯した警備員達に焦った声で告げる。

「アレを持ち出されたら、終わりだ! お前達、急いでアレを捕えろ!! 生きたままでなくて  
もよい、撃て撃て、殺してしまえ」

「今だ、シヨウタ」

警備員達が銃を持ち出しヒカル達の方向に銃口を向けようとする。ヒカルは狙い通りの反応を示してくれたことを確認しショウタに合図を送る。

「ペ・る・そ・な。あらわれろ、ジャックランタン」

ショウタは今はまだ影時間ではないのにも関わらず、また召喚機を使う訳でもなくペルソナを召喚する。ショウタはエルゴ研究所の実験の過程でペルソナ使いとしての能力を十二分に体得したのだ。そして元々ショウタがシャドウの力をペルソナの力で持つて再現するという研究機関で作られた為、通常のペルソナ能力と異なる部分がある。それは。

「撃て、アレを逃がすな」

と、掛け声とともに銃を撃とうとした警備員や研究員は。

「悪戯（トツリクオアトリート）」

「!?うああああああ、あああ」

目の前の壁に跳弾した弾を正面から受けて負傷して倒れた。

丁度ヒカルとショウタが自分達の背にしていた壁である。対して、ショウタとヒカルは今まで警備員と研究員がいた位置にいた。まるで自分達の位置が入れ替わったかのように。

シャドウの力をペルソナの力で持つて再現する。それはペルソナの力で空間や時間

に作用するような特別な力を顕現することである。数年後、実際に風花というペルソナ使いがエスケープロードという能力でタルタロスの何処にいても自分の所に仲間を呼び込む能力を使うことができるように、ペルソナ能力で空間に作用する力などシャドウの力を使うことが出来るようには不可能ではない。

ただシヨウタが通常のペルソナ能力とは違う点とはその特別な力を顕現することを複数のペルソナごとに可能にしていることである。ペルソナ能力は神話の神や悪魔、精霊などを模したアバターを顕現するのだが、神話で語られた存在には権能のような特別な力を持つ。シヨウタはその権能を自分のアバターを通して発動させることができるのだ。

実際、先ほどのジャックランタンの権能として発現させたのは《悪戯（トツリクオアトリート）》という能力で、自分と他者の位置を入れ替わるということを可能にする能力である。

「行くわよ、シヨウタ」

ヒカルは入れ替かるや否や振り返ることなく、正面玄関をくぐり急いで車を確保しようとする。幸い先程玄関に集まっていた警備員や研究員が入り口にいた全員みたくで遮るものなど何もなく車にたどり着く。

これで、やっと逃げ切れる。影時間になるにはまだ一時間以上残っている。これから

車で逃げ切れれば桐条グループの追手から逃げ切れる。そんな希望を抱いて車の扉を開けた時。

影時間が訪れた

「!?ウツソ・・・まだ時間は」

ヒカルが影時間の訪れに驚き、呆然とする。

「ぎゃあああああああ■■■■」

「!?」

先程研究員や警備員と入れ替えた地点から、叫び声が聞こえる。銃の跳弾を受けたと

はいえ死んではないはずだった。だが、声からは確かに死に行く者の声を聞いた。  
(何が、起こっているの?)

と疑問を抱いているとヒカルは背筋が凍る感覚を覚えた。

濃密に漂うのは死の気配

振り返ると

研究所から

死を顕現したシャドウ 「デス」がいた

## 六話 「デス」

死神のアルカナを持つシャドウ、「デス」の誕生。

それはニユクスを現実世界に影響を与えられる領域に呼び込む目的に必要な要素であり、エルゴ研究所にとって実験の最終段階で行われていた実験のはずだった。だが、先程鳴り響いた爆発音が示すように、実験は失敗に終わったはずだった。では目の前にいる存在はなんなのだろう。

(・・・実験は失敗したのは、間違いない。だとしたら、目の前の「デス」は不完全な失敗作?けど・・・どうしてここにいるの?)

ヒカルは目の前の状況を必死に確認しようと、必死に頭を動かす。この場における思考停止が死に繋がるのが、肌伝わる寒気から分かる。後ずさりしながら、必死に距離をとろうとする。が、相手は黒い霧のような体から、黒いロープのような触手をヒカル達に対して伸ばす。

「ッ!?不味い!」

「《悪戯(トツリクオアトリート)》」

が、シヨウタの《悪戯(トツリクオアトリート)》を発動して位置が入れ替わり、黒い



触手は入れ替わる前にヒカルとシヨウタがいた位置にあった車を貰いた。

（コチラを狙ってきた？何故、意志はなく本能のみで行動しているはずなのに・・・!?まさかコイツ、足りない分の力を補うつもりか）

「デス」は、位置を入れ替わってもまるで獲物の位置が分かっているというかのようにコチラ側にいるシヨウタの位置を補足する。

シヨウタは「デス」の顕現に必要な12のアルカナのシャドウを体内に宿らせる事で複数のペルソナ能力を使う事を可能にしたペルソナ使いである。その為、「デス」にとって、シャドウとペルソナが根本的には同じ力である為にシヨウタの中に宿るペルソナで完全体になろうとしているのだ。

「デス」は今度は黒い触手を伸ばしてくるのではなく、今度は本体が迫ってくる。決して早くはないが、それでも着実にヒカルとシヨウタの近くによって来る。《悪戯（トツリクオアトリート）》は自分と他者の位置を入れ替えるという能力であるため、迫ってくる相手に対して能力を使用しようが距離を空けることができないう弱点がある。その為能力を使用しても意味がない。けれど手札は複数あるのがワイルドの特性である。

「ペ・る・そ・な。アルプ！《透明な帽子（インヴィジブル・ハット）》」

シヨウタは、ジャックランタンからペルソナチェンジで入れ替えると、北欧神話の妖精の国アールヴヘイムに住む光の妖精アルヴと同一視されるペルソナであるアルプを

召喚する。寝そべった小悪魔を思わせる容貌のペルソナはシヨウタの命令のもと《透明な帽子（インヴェイジブル・ハット）》を発動させる。

元々アルプが持っていたとされる透明になれる帽子を再現する能力である《透明な帽子（インヴェイジブル・ハット）》は視覚的に姿を消すことができるのみだけではなく一時的にペルソナ能力の感知を妨げる効果があるのだ。

その為、ヒカルとシヨウタのもとに迫ってきていた「デス」も標的を見失い突如、動きを止める。本能で動いているが故に感知できなければ、自発的に行動することはないのである。

（とはいえ、シヨウタが発動を継続するにも限りある・・・急いで離れないと）

ヒカルは「デス」が視覚や聴覚ではなく力の感知で持つて場所を特定していることを見抜くと、物音をたててしまうのも気にせずエルゴ研究所から脱出しようとして外に出て、人工島「辰巳ポートアイランド」から本島へと繋がる橋へと向かおうとする。

（一刻も早くこの場から離れないと、私達だけではなく世界が終ってしまう！）

このままシヨウタの中の力を取り込んでしまえば「デス」は完全体になってしまうだろう。それだけは避けなくてはならない。死んだ先輩の為にも。とは言え、今どうするかという選択肢がない以上急いでこの場からの離脱を試みる。取りあえず遠くに逃げなくてはならない。《透明な帽子（インヴェイジブル・ハット）》の効果は確かであることか

ら逃げ切れることに希望を抱く。

だが、その希望は打ち砕かれる。

「デス」から50メートルぐらい距離を取れたと思った時、突如影時間から色の付いた元の現実世界に戻ったのだ。と同時に、影時間補正を受けていたシヨウタの能力の《透明な帽子（インヴィジブル・ハット）》の効果が不安定になり解除される。

「何!?まさかあのシャドウを中心に影時間を発生させていたの?」

予定より一時間早い影時間の発生、それが「デス」のシャドウの仕業である事をヒカルは見抜く。驚く時間ももなくすぐに、現実世界から影時間へと世界は逆戻りするかのように戻っていく。

そして其れが意味することは「デス」に接近されているということだ。

「GYAAA ■■■■■」

今度は、接近するだけでなく逃がさないとばかりに体の一部を伸ばす。

後ろから高速で伸びてきた細い黒い槍のようなモノはシヨウタへと迫り、ヒカルの腹へと突き刺さった。

「ガッ!」

「ヒカル!!!」

ヒカルはシヨウタを担いだまま地面に倒れる。服が血で染まっていくのを感じる。

明らかに重症といえる様なキズだ。

だがそれよりも大事なことにある。

(シヨウタが捕まれば終わりだ!!!)

ヒカルは必死に腹の痛みに耐えながらシヨウタを逃がそうとする。だがシヨウタが今まで見たことのない悲しい顔で自分を心配していて、迫りくる「デス」に気づくのが遅れる。シヨウタが「デス」に対して反応するにも時間が足りない。

世界は終わるそんなイメージが漂う最悪の事態を。

「デス」の進撃を止めたのは。

銃声だった。

「ペルソナ。パラディオン」

「デス」の進撃上に立ち、立ちはだかるのは金髪色の髪を持つ美少女だった。

機械を思わせる風貌のペルソナは、「デス」に打撃を加えてヒカルやシヨウタから距離

を取らせる。

鋼鉄の乙女は月の異様に輝く影時間の中、宣言する。

「対シャドウ特別制圧兵装七式アイギス、シャドウを殲滅するであります」

## 七話 別れ

ヒーローの如く現れたアイギスの登場により、自分達には時間ができた。

最後の別れの時間が。

「ヒ、ヒカル、だ、だいじょうぶ？。ちが・・・ちが、とまらないよ」

ヒカルは薄れ掛けていく意識の中、シヨウタが目の前でペルソナでディアラマを使っているのが分かった。ディアラマは中級回復魔法で腹が貫かれた傷を完全ではないにしても、止血や回復することが可能だろう。だが、シヨウタの回復魔法がヒカルの傷口には効いていなかった。

「デス」という死を司るシャドウの力の強大であるのか、その死を司る特質が回復を阻害しているのかヒカルには分析する余裕がない。ただ一つだけ分かることは自分がこの場で死ぬということだった。

「ペ・る・そ・な。なおせー！ーディアラマ!!!」

シヨウタは、ガンガーのペルソナを使い再びディアラマでヒカルの傷を治そうとす

る。何度も、何度も。シヨウタの顔には焦りがあつた。シヨウタは研究所で人体実験を受けていた中、唯一生き残つたペルソナ使いだ。何度も人体実験を経験して、何度も同じ実験で死んでゆく被験者の姿を見た。だからこそ分かるのだ、目の前でヒカルが、死んでゆくことが。

ヒカルは、死にゆく自分の体を客観的に分析しながら理解しつつもその場で最も気になつたのは、シヨウタの初めて見る泣きそうな顔だつた。シヨウタは人体実験の被験者として物心がついた頃から過ごし、環境に適応する為か自分が死ぬかもしれない実験でも弱音を吐く方法や悲しむという方法を知らなかつた。研究者達からモルモットとして扱われても悪意に対して憎しみをぶつけるという方法を知らなかつた。

実際初めて会つた当初から、憐れみを感じてしまう程に優しさを知らなく、負の感情を持ちえなかつた少年が、そんなシヨウタが泣いている。

多分人として当たり前の感情、それを持つてくれた。その意味が分からないヒカルではなかつた。

(・・・覚悟を、決めろということかしらね)

ヒカルはシヨウタの泣き顔を見ながら覚悟を決める。本来ならシヨウタが一人でも暮らせるようになり、他の手段が見つからなかつた時の最終手段を取ることを決める。死に行く自分の命を利用してこの子に対して贈り物をしよう。

「ハア、ハア、泣くな。シヨウタ」

「だって、ヒカルが」

シヨウタは叫ぶように声を出す。年相応の顔を見せるんだという感想を抱きながら、ヒカルはその泣き顔をあやししながらポケットに入っている準備していた錠剤の一つを飲む。

「ああ・・・多分私は死ぬな」

「!!!」

ヒカルは、シヨウタが言い詰まっていた自分の死を宣告する。ヒカルは錠剤の力で持つて、自分のペルソナ能力が強制覚醒されるのを感じる。通常強制覚醒された人工ペルソナ使いは過去の記憶を失ってしまい、制御剤を飲まなければ自分のペルソナに襲われかねないというリスクを負う。けれどこの覚醒剤はヒカルが自分自身の為に作ったものであるため、記憶の混濁は起こりえないし錠剤を飲んでしまった以上、長く生きるつもりはない。ただ自分の目的さえ達成できれば十分だ。

「だから、今から言うのは、ハア、ハア、最後の言葉だ。よく聞け」

ヒカルは腹の痛みに耐えながら、ペルソナの強制覚醒に耐えながら言葉を紡ぐ。シヨウタは死ぬという言葉聞き俯いたままだ。けれど最後の言葉と聞いて感情が爆発した。



「さいい……！さいいごつてなに！！やくそくしたじやないか。けんきゆうじよから、でたら、たのしいことや、うれしいことをおしえてくれるって！！うそつき！！うそつき！！」

多分シヨウタ自身、自分の言動がこの場で間違っていることぐらい分かっている。だが最初で最後の泣いてのわがままだった。ただ生きてくれと、訴えるわがままだった。

子供らしいわがままな態度に好ましく思いつつも自分の時間がないことも重なって  
ドンツ！！ と

ヒカルは取りあえず頭突きで黙らせた。威力の無い頭突きだが、黙らせるには十分だった。

「聞け、シヨウタ。今から、私のペルソナ能力をお前に渡す。安定した形のペルソナではないが、お前に生命力を渡すには十分だ」

ペルソナ能力で自分の生命力を渡す能力を他者へ移すことのできる能力者は確かに存在する。けれど、ヒカルはそもそもペルソナ能力者ではないし、生命力を他者へ渡す能力などない。けれども、ペルソナ能力そのものを他者へ植えつける実験は幾度となく繰り返し広げられた為、もう一つの錠剤の力を使って強制覚醒したペルソナ能力そのものを移すことはできるのだ。ペルソナ能力全ての移譲は生命力の移譲の効果もあり、シヨウタの失われた寿命を回復することができると言える。

……命を引き換えにすることと引き換えに。

「……アア……」

シヨウタは目に涙を浮かべ、現実を直視できないでいる。けれど目を離してはいけな  
いと、必死に理解しようとする。ヒカルはもう一つの錠剤を口に飲み込みながら話す。

「……余り、湿っぽい事は嫌いなんだ。だから私が伝えたい事はただ一つだ」

ヒカルはシヨウタを手繰り寄せ、抱きしめながら最後の言葉を繋いだ。

「シヨウタ。前を向いて生きな、最後の瞬間までな。愛してるよ」

ヒカルの体から光の様なものが、出てきてシヨウタの体の中に入る。

「あああああああああつあ!!」

ヒカルは死んだ。

シヨウタは叫び声が影時間に響き渡る。

人間の負の部分を持つようになった少年は、この瞬間に確かに人間になったのだら  
う。

……確かに芽生えた、強い憎しみと共に。

## 八話 「荒ぶる神」

ペルソナとは心の力を元にする異能力である。

愛情、友情、敬愛など様々なプラス方向の心の力を糧として強くすることができる。実際ワイルドに目覚めたものはコミニティと呼ばれるものを形成して他人との繋がりを通して自分のペルソナを強くすることが出来るのだ。この方法は、プラス方向の心を育成する方法で時間がかかるも安定した状態でペルソナを着実に強くすることが出来る。

一方、対をなすマイナス方向の心を育成する方法は非常に危険であるが、ペルソナを劇的に強くする方法がある。

それは、強い絶望を与えることだ。

「はああああああああつあ!!ペ・る・そ・な」

シヨウタは、アイギスと戦闘中の「デス」に向け割り込む形で自分のペルソナであるイザナギを召喚してジオンガを「デス」に当てる。中級雷魔法であるジオンガでは大し

た威力を与えられない。寧ろ、雷属性を苦手としているアイギスの傍でジオンガを使うことは悪手であると言えるだろう。

けれど、ショウタに渦巻くのは憎しみ。我を失い、ただ敵を滅する意志にだけ支配されている。

通常のジオンガよりも、ジオダインに迫る威力を持っているのは込められた思いの強さであろう。

けれど、強力な力を奮う一方でいつもよりペルソナの制御が危ういのは使い手の精神状態を現している。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■」

「デス」はアイギスの中の黄昏の羽を狙い力を補充しようとしていたが、乱入者の存在を認めるとショウタを敵として認めた。ジオンガの攻撃を受け怯みをみせるも、「デス」は反撃を繰り出そうと黒い槍のように体を変形し攻撃を加える。

けれど

ドドドドドドドドツ

銃声は鳴り響く。

「私を忘れないで欲しいであります」

アイギスの側面から射撃は「デス」の態勢を崩し、ショウタへの攻撃は不発に終わる。

アイギスは冷静に「デス」の戦闘力を分析し、25号であるシヨウタとの連携を取る事を勝率の向上へと繋がる方法として選択する。だが、シヨウタの様子が何時もと違う。常時のシヨウタなら、年不相応の戦闘経験から慎重に生き残る為の手段を選択するはずだ。

「ジオンガ!!」

「っ!」

けれど今のシヨウタの戦いは、痲癩をぶつけるような戦い方であった。繰り返し「デス」に向かってイザナギの中級雷魔法を落とす。さつき同様に効いている様子は無いが、威力はさつきよりも高くなっている。

アイギスは機械である事から、雷属性の攻撃への耐性は低い。先程のジオンガの攻撃の余波に当たりそうになることから、何のつもりでありますか、と視線をシヨウタの方向へ向けて

異常を確認した。

(あれは・・・何でありますか?)

アイギスは、25号であるシヨウタと実験を共にする事が多々あり、戦闘力やペルソナ能力を概ね把握していた。だからこそ、今のシヨウタの状態の異常が分かるのだ。ペルソナの形が不安定となり、テレビにノイズが走ったようになっていてだけでなく、何

か別の形態になろうとしているのだ。ただ単にノイズが走っただけでは、召喚失敗として計測されるだろう。だがペルソナが、ノイズを走らせながら力を増しているのを感じるのだ。機械であるはずのアイギスが、感じるなどという抽象的な結果を計測するのもペルソナが心の力に関係しているからだろう。

「・・・チェンジ！出てこいスサノオ」

シヨウタは、ペルソナチェンジで戦闘方法を切り替えてスサノオを召喚する。黒い髪で骨の冠と骨の剣が象徴的なペルソナである。

ただ、今の状況で何が不味いかというと、「荒ぶる神」のスサノオを召喚したことが不味かった。

スサノオは「荒ぶる神」として知られている須佐能乎命をモデルとしたペルソナである。神名の「スサ」が荒れすさぶの意として嵐の神、暴風雨の神とする説もある程で、日本の「荒ぶる神」としては有資格である。須佐能乎命は、母の国へ行きたいと言って泣き叫ぶ子供のような一面、高天原では凶暴な一面、八岐大蛇退治の英雄を見せるなど多面的な側面を見せる為一概に述べることはできない。

では、スサノオが「荒ぶる神」である事の何が問題であるかというところとシヨウタの今の心身状態と非常に一致しているのだ。イザナミである母がカグツチの炎で死に、母の黄泉の国へ行きたいと言って泣き叫ぶ子供の一面とマッチしている。その為、アイギスが

不可解と思つていたシヨウタの異常がはつきりした形で次の段階に移動した。

スサノオは不安定ながらも形を成していた状態から崩れ、青いオーラ状の力となつてシヨウタの周りを取り囲み、骸骨のようなものがシヨウタを取り込む形で、形をなす。通常のペルソナが不安定ながらもより強力な形で体現しているのだ。

「デス」が黒い槍のように体を変形し攻撃を仕掛けるも、骸骨の骨と青いオーラのようなものがシヨウタを取り囲み攻撃を仕掛けることが出来ない。そしてシヨウタの意志に反応して、骸骨の手は「デス」を思いきつり、研究所の入り口から橋の方角へと吹つ飛ばした。そしてシヨウタは、追い討ちをかける形で橋の方角へと急ぐ。

普通のペルソナよりも「デカイ」状態で顕現している骸骨のペルソナは、その大きさだけで確かに強力である。だが同時に狂気を感じる。シヨウタの憎しみに呼応して強くなっているかのように。

アイギスはシヨウタの状態を不安視するも優先順位の高い「デス」の殲滅もしくは封印に移ろうと、シヨウタも向つた「デス」が吹つ飛ばされた橋の方角へと急ぐ。

そこで、見たものは「デス」が車の中にいる二つの棺桶をこじり開けて力を吸収する様子と車から投げ出された女の子の姿だった。

## 九話 始まりのエピローグ

心の中に占めていた憎しみから僅かながらも正気を取り戻したのは、車から投げ出された少女の顔を見た時だった。まるで、鏡を見たかのように悲しい気持ちが伝わってくる。

当然だろう。今、少女の家族が「デス」に殺されたのだから。

「つくー！」

シヨウタはかろうじて正気を取り戻すと、急いで車から投げ出された少女を避難させようとスサノオの手を展開して確保する。「デス」が研究所で研究員を手当たり次第に遅いエネルギーを摂取していたように、少女を次の獲物にするのは明白であった。本能的で動く今の「デス」に、幼子だからといって掛ける義理があるはずがない。

「あああああ、お母さん、お父さん……」

少女は異形のスサノオに掴まれ引き寄せられるという非常事態においても、悲しみが勝つてか反応が見られない。

（僕の責任だ……）

シヨウタは自分が、意図的ではないとはいえ少女の親を奪ってしまったことに自責の



念を抱く。自分が憎しみの余り、「デス」に手当たり次第攻撃して橋の方角にぶっ飛ばさなければ、こんな事にはならなかっただろう。罪悪感を少女に感じるも、シヨウタは落ち着いてきた頭脳で次になすべき事を考え行動する。スサノオの手から、少女を下ろし「デス」に再び向き合う。

一人ではない。

「協力が必要であります。25号」

「……25号じゃない。シヨウタだ。」

シヨウタが対峙するのに並んでアイギスが、「デス」に向かい合う。

「了解であります。シヨウタさん」

返事と共に火蓋は切られた。

アイギスは「デス」に向かって銃撃を浴びせる事で、牽制する。その隙にスサノオの骸骨の手を伸ばし逃がさないとはかりに「デス」を捕える。本能で動く「デス」に防御や回避の思考は無い、ただニクスス降臨の為のエネルギーを摂取しようとするだけだ。反撃とばかりに「デス」は黒い槍状に形を変形して攻撃するもシヨウタのスサノオが展開されていて本体に攻撃は届かない。

あつけない程に短い戦闘ではあるが、「デス」を確保できたように見えた。

「アイギス。「デス」を確保できたが、殺せないのか」

今まで中級雷魔法ジオンガ、アイギスの銃による貫通攻撃、スサノオによる打撃攻撃を繰り返して行ったが、とてもじゃないが殺すことが出来ない存在だということが分かった。だからこそ、対処をアイギスに確認を取る。

「殲滅手段が現手段では困難と判断されるであります。その為、封印がベストかと思われるであります」

「そうか……」

自分の仇であり、少女の両親を奪った「デス」を忌々しいとばかりに睨めつけながら返答する。殺すことが出来ない、その行き場の無い怒りは憎しみとして沸き立ってくる。

スサノオの力は憎しみを糧に強くなり、青いオーラは力を増す。

それなのに、……どうして黒い槍がシヨウタに近づいてくるのだろう。

「っー」

捕えたはずの「デス」の攻撃の威力が明らかに増してきている。スサノオの力は増してきているはずなのに。

（ニユクス降臨の為のエネルギーを補給していたはずだ……。さっきの行動から分かる通り人の命をエネルギー変換して獲得していた。そして今の「デス」にエネルギーを獲得手段はない。なら……何故「デス」の力は増してきている？）

シヨウタは今の「デス」の状態を冷静に分析しようと、先程自分に流れ込んできたヒカルの記憶を辿る。

先程ヒカルがシヨウタをに生命力として自分のペルソナを与えたことは、三つの恩恵をシヨウタに対してもたらしていた。

一つ目は、シヨウタの短くなっていた寿命を延ばすという生命力の向上。ヒカルが自分の命が途絶える事を悟り、せめて本当に潰える前に恩恵を与えようとしてもたらしたものである。

二つ目は、ヒカルのペルソナを受け継いだことによる経験の承継。精神エネルギーであるペルソナを完全に譲渡されたことで、シヨウタはヒカルが持っていた演算能力、洞察力、知識を憑依経験として自分のものにする事が出来たのである。

(……「デス」はタルタロスにニクスを降臨させる為の働きを持つ。ならば、「デス」とタルタロスには何らかの繋がりが……)

シャドウ研究者であったヒカルの知識は、解答を出すのに十分であった。一方で「デス」の力は時間と共に増していき、スサノオの手から…逃れる事に成功する。

「GYAAAAA ■■■」

「デス」の力は増し、先程よりも鋭い攻撃がシヨウタのスサノオに触れてそのまま吹き飛ばされる。衝撃を必死に殺しつつも態勢を整えて、アイギスの横にいく。

「アイギス、「デス」の対処法が分かった。それは、……」

その後の戦いで、アイギスとシヨウタは満身創痍になりながらも「デス」の封印に成功する。けれど、それは望まぬ形でその場にいた少女に封印するという方法でしかなかった。

それと同時にシヨウタは「神器」としての力を手に入れる。

けれど、その時の記憶は誰も今は覚えていないままである。真実は誰も知らない。

一度地獄から自由を取り戻した少年もその戦いで気を失い、起きた時に見たのは更なる地獄の再現であった。ストレガという研究所へと軌跡は続いていく。

## 設定集

### 1. ペルソナ能力について

集団的無意識の中から、神話の神や悪魔、精霊などを模したアバターを顕現する能力である。人間の暗部を見つめる力がゼロになる時シャドウとなるのに対して、制御できるのがペルソナ使いである。

ペルソナとシャドウが同じ力であるという公式設定を参考に、ペルソナ使いがシャドウと同じように時間や空間を操る力を持つことが出来る様にした設定です。

完全にオリジナル設定ですが、風花のエスケープロードなど原作でペルソナ能力を使って空間移動してるんじゃないかね。という場面があつた為、ペルソナ能力を幅広く活用させた目的でこの小説を書き始めました。

### 2. ペルソナ能力の顕現について

本作ではペルソナ能力の設定として一般的にペルソナを顕現できるのは、

影時間補正+心の強さ(平常時) + 召喚機による増幅+その他

といった要素がペルソナの顕現ラインを超えている為に召喚できる、としました。

その為影時間補正が無くなると、ペルソナ使いであろうと記憶混濁が発生するという訳です。

召喚機の増幅については、召喚機が死を擬似的に体験させることにより火事場の馬鹿力のようなものでペルソナ使いが顕現ラインを一時の間越えさせる働きを持つものとして解釈しています。けれど、人間の思いは決意なども時間と共に劣化することは避けられないものである為一般的なペルソナ使いは、ワンアクションしたらペルソナが消えてしまうと解釈します。

召喚機の増幅 時間とともに減少する

心の強さというのは、平常時の心の強さで今作においては最も差別化を図るつもりです。

というのも、ゲームではペルソナ使いがLV100で限界が来るわけですが、それは戦闘において心が鍛えられるのの限界が来るものだと解釈します。

差別化については、良くも悪くも人間らしいキャラクターがペルソナ3では多いのですが、一般的な感性に収まる形です。

その他の要素について、女主人公やショウタは体内にシャドウを宿しているという事で内面から補正を受けているものとしませす。アイギスの場合は、「黄昏の羽」を宿してい

る形で補正を受けている形です。

### 3. ペルソナの権能ついて

神話の神や悪魔、精霊などを模したアバターを顕現する能力である。という事で、権能を使えるんじゃないか、という事で神殺しの世界やハンターの世界を参考に制約つき  
の権能を使えるようにするつもりです。シヨウタが権能を使える理由としては、召喚機  
なしで召喚することが出来るという事で、

#### 影時間補正+心の強さ(平常時)+その他

が顕現ラインを常時超えているからとして解釈します。例えとしては、自転車で補助  
輪(召喚機)を使っているのか使っていないのかで、自転車によるロッククライミング  
が出来るかどうかが違うからとしています。

#### persona

#### イザナギ／愚者

#### 権能「????」

#### ジャックランタン／魔術師

#### 権能《悪戯(トッククオアトリート)》

自分と他者の位置を入れ替えるというトリックキーな能力。  
空間を入れ替えている訳ではない為、空間移動ではない。

相手のアクションに対して反応して発動。

「お菓子をくれなきや悪戯するぞ」という風に相手が自分のアクションを妨げるアクションを取った時に発動することが出来る。

アルプ／恋愛

《透明な帽子（インヴィジブル・ハット）》

視覚的に姿を消すことができるのみだけではなく一時的にペルソナ能力の感知を妨げる効果がある。

北欧神話の妖精の国アールヴヘイムに住む光の妖精アルヴと同一視される存在であり、アルプが持っていたとされる透明になれる帽子を顕現する権能である。

ただし権能の使用中は他の攻撃を仕掛けることはできない。

ガンガ|／女教皇

権能「????」

スサノオ／愚者

権能「荒ぶる神（スサノオ）」

NARUTOのスサノオをイメージした権能であり、スサノオの多面的な英雄的側面に応じた能力発動を可能とする権能である。



## ストレガ編

## 十話 次へのプロローグ

意識がはつきりし始めたのは、不思議にも夢の中だった。

「ほっほっほ、これはまた数奇な定めを持つお客様だ」

老人の声が聞こえて、意識がはつきりし始めると其処は不思議な空間だった。部屋全体が巨大なエレベーターの様に移動を続けている。果てしなくそれこそ終わりの無い終着点へと向かっているかのようなスピードである。

「えーと、……此処は夢の中ではないのかな？」

目を覚ました？少年であるシヨウタは、取敢えず夢の中と断ずる根拠に値する老人に声を掛ける。自分がいつの間にかイスに座っててテーブルの前の老人と向き合っているのか、など疑問に尽きない事はある。けれど目の前の老人の鼻の大きさが明らかに人間のサイズではない事が目につき、夢の中と判断された。

「ほっほっほ、失礼、申し遅れました。私の名は、イゴール。……お初にお目にかかります。こちらはエリザベスにテオドア。同じくここの住人だ」

イゴールと名乗る老人に続いて、共に老人の後ろに控える二人はシヨウタに対して挨拶

拶してくる。

「エリザベスでございます。お見知り置きを」

「テオドアと申します。テオとお呼びください」

エリザベスとテオドアと名乗る二人は美男美女という言葉よりも、人間離れた美しい容貌を持つているという言葉が似合う二人だった。二人ともエレベーターを案内するエレベーターガールとベルボーイを思わせる青い服を着ているのが特徴的である。エレベーターの様な部屋という捉え方はあながち間違っていないのだろう。

「ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所……。人を迎えるなど何年ぶりでしょうな」

シヨウタが自分の状況をイマイチ把握できていないのを、置き去りにイゴールという老人の話はドンドン進んでいく。

「此処は何かの形で“契約”を果たされた方のみが訪れる部屋……。今から貴方はこの“ベルベットルーム”のお客人だ」

シヨウタはヒカルのペルソナを継承したことで憑依経験で頭脳は向上している。その為“契約”というモノがどんな重みを持つものなのか、おぼろげながらも把握していた。その為、慌てて老人に問い質す。

「ちよ……つと。待ってッ！契約なんて僕がしたの」

「左様。お客様は覚えていないようですが、口頭で確かに契約をなされました。されど、このベルベットルームに訪れるには書面で明確に返事されなくては、鍵をお渡しできない故にこうして招いた次第です」

正直、自分には何の契約をしたのか覚えていない。しかも口頭での契約を六歳児に迫るなんて、厳しくないか、詐欺だ、という思いがある。けれどイゴールの次に掛けた言葉がシヨウタに蹲っていた疑念や不安の種を晴らしてくれた。

「難しく考える必要はございません。貴方が支払うべき対価はただ一つ……。」契約」  
に從いご自身の選択に相応の責任を持って頂くことです」

「え……つと。それだけ？」

シヨウタは自分の責任を自分で取るという、一見してみれば対価にもならないような事を要求する老人を訝しげに見る。見た目が不気味であるが為に必要以上に疑ってしまうのは致しがたないことだろう。

「貴方は『力』を磨くべき運命にあり、必ずや私の手助けが必要となるでしょう」

シヨウタの疑念に満ちた視線に対して、イゴールは道を指し示す預言者の様に語る。シヨウタは、その言葉を何故か真実を語る言葉として信じられた。

けれど、まだ疑わしく後ろにいる美男美女の片割れであるエリザベスに視線を向ける。

「私どもはシヨウタ様の旅をお助けするのが役割にてございます」

「……うん。分かった。契約する」

不気味な老人はともかく、エリザベスが嘘をついている様子がない事を直感ながらも悟ると契約を果たすことを決める。手助けするというのならば、特に断る理由などないのだから。

「ココに名前を書けばいいのかな？」

シヨウタは目の前のテーブルに置いてあった契約書に目を向ける。丁度名前の欄が無い契約書である。

「はい。シヨウタ様が自分でお書きください」

エリザベスは小さな客人であるシヨウタに羽ペンを渡すと、シヨウタは署名欄に名前を書き始める。名前を書く字が子供ながらの丸い字であるのが、ご愛嬌といった所だろう。エリザベスは今までにない幼い客人に対して、珍しく優しい表情で見守る。

「これで、いいのかな」

シヨウタは署名欄に自分の名前として「シヨウタ」と書く。

「現状では、お客様に正式な「名」が無いという事で受理させていただきますが、正式に「名」を獲得された際には再び契約をなさる必要がありますがそれで、よろしいでしょうか」

「また、書き直すの？」

シヨウタは契約をそんな何度も交わす事に疑問を抱く。そんな思惑を見透かした様にエリザベスは、然りと頷く。

「はい。「名」とは、個人そのものを指し示すものです。その為「名」を獲得された際にもう一度自分の意志で契約をなさってくださいれば結構です」

確かに今の自分には「名」が無い。自分自身が何者であるのか、という問いを答えてくれる人もいない、という事を思い立ったシヨウタは納得する。

「ともあれ、これでシヨウタ様はこの部屋の客人として正式に認められました。再びこの部屋を訪れる際の鍵をお渡しいたします」

エリザベスの鍵を渡すという言葉の後、シヨウタの手のひらの中に鍵のようなモノが握られているのが分かる。

「お客様は、今長い眠りについておりましたがすぐに目が覚めるでしょう。では、またお会いする日を」

「つて、待てまだ聞きたいことが」

シヨウタは自分の疑問が解消されずに話が進んでいることに納得がいかず、呼び止めようと席を立とうとして、意識が再びボンヤリし始めるのを感じた。不思議な話ではあるが、夢の中で再び眠りに就くことになる。

## ☆☆☆

「ご当主、覚悟を決めていただきましたかな」

眼鏡を掛けた研究員は白衣に身を包みながら、桐条武治に対して問いかける。その目には、表面上ではあるが狂気は見られない。

「幾月か、……他に方法は無いのか」

ご当主と呼ばれるようになって、数か月経ったがその名を背負う様になって見せる顔は疲れたものだった。ポートアイランドで起きた「爆発事故」の責任を取るようになって事に始まり、タルタロスの解明と難題が次から次へと振り掛かってくるのだから仕方がない事かもしれない。

「爆発事故により「保護」された少年に始まり、ご当主の娘を含めてペルソナ能力の顕現が幼い年代によって発現されている事からもこの計画は遂行しなければなりません。……ご当主もご存じのはずです、影人間の被害が広まりつつあるという現状について」

「……………」

苦悩が見える顔を覗かせながらも桐条武治は黙り込む。世界の為、そんな言葉でかたづけられる程こんな実験は簡単なものではない。今からこの実験を行えば、自分は地獄に落ちるだろう。自分の命さえも取るに足らない罪のはずだ。けれどその実験を行わなければならぬ、それは。

「それとも、ご当主の娘が被検体の役割を」

「……分かった。幾月、お前の指導の下で人工ペルソナ使いの開発部門「ストレガ」を進めてくれ」

人でなしである決定であることは分かっている。けれど自分の娘である美鶴には罪を背負わせたく無いという思いが、「ストレガ」発足のきっかけになる。例え、親の居ない孤児という世間では居なくなっても分からない子供を利用した実験であったとしても、桐条のトップとして、世界の為に、という大義名分を掲げて行う事になる。その実験を行った本当の理由が娘への愛だとしても。

愛とは時には残酷である、何故なら誰かを選ぶという事は必然的に誰かを切り捨てるという決断に基づくからである。

この決断を元に「ストレガ」は発足されて、新たな悲劇が舞い戻る。

## 十一話 再び地獄へ

ベルベットルームで意識を無くしたと思ったシヨウタが今度こそ目を覚ましたのは、現実世界であり、自分にとって見慣れた研究所の風景だった。

(此処は…、というか僕は何を……)

ベルベットルームでの出来事より前のことについて、現実世界に戻った事でようやく把握することができた。爆発音と共に、ヒカルと共に研究所から、逃げ出したこと。「デス」という強力なシャドウと戦い、ヒカルが……死んでしまったこと。

(不思議だな……。ヒカルが自分の中に居るのを感じると生きてるように思えるのに……)

ヒカルの死を改めて再認識したシヨウタは悲しみが湧き上がり、涙が目少し溜まる。ヒカルが亡くなった時に思いきつり泣いたはずなのに。

ヒカルが死んで自分の中に蠢くのは、どうしようも無い程の空虚感だった。自分が何をしたいのかさえ、分からない。けれどシヨウタの胸の内に残るのは、ヒカルの残した「前を向いて生きろ」という言葉だった。

死を無駄にしたくない。目を背けることは、したくない。そんな思いに浸ってボンヤ



りしていると、研究室のドアが空き研究員が入ってきた。

「ふっふっふ。やっと目を覚ましてくれましたね、少年。いや、いや、被検体が目を覚ましてくれたのは非常に嬉しいですよ」

白衣に身を包んだ怪しげな目をした研究員は、シヨウタに対して気軽に話しかけてくる。ただしその気軽さは決して、親しみからくるものでないことが分かる。シヨウタの眠りが覚めたことを把握している辺りから、この部屋は監視カメラで監視されていたのだろう。そして被検体と自分を呼ぶ事から、事情は把握できた。

「つまり……、此処はまたエルゴ研究所の中って事でいいのか」

「おや、見た目の割には落ち着いていますね。もう少し駄々をこねると思いましたがよ。その回答は、YESです。此処は新しく建てられたエルゴ研究所です」

コチラを見る目は実験体を見る目つきであることには、変りがないが応答はしつかりしてくれるらしい。

「私の名前は、扉間。このエルゴ研究所で研究員として勤めさせていただいています。君は25号で間違いないかな」

「……25号じゃない。シヨウタだ」

エルゴ研究所の爆発事故で研究員が全滅したのを把握しているシヨウタは、自分を25号と呼ぶ事に不審に思いながらも、名を訂正する。

「では、シヨウタ君で。君を知っているのは簡単な話ですよ。7か月前のポートアイランドの爆発事故で唯一生き残った被検体ですね。君の事については、残存していた資料から把握させてもらっていますよ」

聞き分けがある辺りは今まで会った研究員よりもマシなのかもしれないが、それよりも聞き過ぎせないことがある。

「……7か月前？」

「そうですよー。自分の体が衰えているのを感じているのでしょ。爆発事故で意識昏倒していたあなたを「保護」した私達が今まで世話をしていたのですから」

確かに目を覚まして起き上がる程度の動作しかしていなかったが、体の節々が痛むのを感じる。余程長い間筋肉を使わなかったからだろう。それでも動作できるのは、自分が寝ていた間に筋肉をほぐすなどの適切な処置がなされていたからだろう。シヨウタは丁寧な処置がされていた事を認めながらも、扉間と名乗る男を睨みつけながら話しかける。

「……お礼はいらないよな。エルゴ研究所って事はまた桐条鴻悦の実験が再開されるってことだろ」

「ええ、無論要りません。けれど一つ訂正があるならば、桐条鴻悦の実験ではありません。桐条武治による実験です」

「……………。どうしよういよ。」

シヨウタが疑問に思い問い質すと、扉間という男はシヨウタに対しても丁寧はその答えを教えてくれた。桐条鴻悦が爆発事故の際に亡くなり、今は桐条武治の下で罪を清算する為に奮闘していること。今のエルゴ研究所はその為にタルタロス探索の方法を開発していること。丁寧に、被検体と呼ぶシヨウタに説明する辺りでは、常識や分別はあるのだろう。……話し方から分かる、卑劣な感性を持っている事を除いては。

「…………という事で君は、シャドウと戦うペルソナ使いのサンプルデータとして「保護」されました。いやー幸福だな。こんな貴重なサンプルが生きているなんてそう思いませんか?」

「…………知らないよ」

返答に困る話の繋げ方では有るが、取敢えず状況は把握できた。桐条武治の下で罪の清算がされるという事、ならばエルゴ研究所で行われていた悲劇がもう二度と起こらないだろうと予測された。其れなら、今まで見てきた地獄のような実験で人が死んでいく心配はないはずだ。明日死ぬかもしれないという恐怖に支配される環境にはならないはずだ。そんな樂觀的予測がシヨウタの中でたてられ、少しは安堵する。……二度と目の前でヒカルが死ぬような、人が死ぬような機会に向き合いたくない。

「まあ、いいでしょう。君がこれから生活する場所に案内致しましょう。付いてきてく

ださい」

扉間は一通り、シヨウタに話すと立ち上がりドアの近くまで行く。シヨウタは痛む体を押しつつも、立ち上がりゆっくりながら付いていこうとする。一度はヒカルと逃げようとした研究所ではありまた戻ってしまったが、少しはマシになるかと樂觀的な思いを抱きながらドアを通り、研究所内を見て回ることになる。其れが本当に樂觀論だと気づくのはすぐ後になるのだが。

☆☆☆

「なんだよ、これ」

「どうしましたか？シヨウタ君、何か変なものがありますか」

シヨウタは震える声をあげながら現実逃避したい思いでいっばいになる。そんなシヨウタの様子を把握しながらも扉間はシヨウタに対して気軽に声を掛ける。

「別に可笑しいことなんて何もありません。だってコレは君にとって見慣れた風景の  
はずだ」

「……っ!!」

そうシヨウタにとって見慣れた風景だった。ただ今行われている実験は自分にとつ

でも見慣れた風景なのでは無い。自分が居た桐条鴻悦のエルゴ研究所では、被検体として対象とされたのは一般的に浮浪者や借金の責務者など、世間で後ろめたい事情を持つものが桐条グループの下で弱味を握られて被検体とされるなど大人が大半であり、シヨウタのような子供はごく僅かといっていいはずだった。それなのに目の前には、研究に使われている被検体として自分と同じ年代の子供だけが使われている。

確かに白衣を着た研究者が薬を開発して、被検体に投与する事で助ける訳でもなくただデータを取るといった風景はシヨウタにとって見慣れた風景だった。周りに居る全ての大人が子供を助ける訳でもなくただデータを取っている、そんな酷い状況を見るとさっきのシヨウタが抱いていた楽観的予測が、本当に楽観的だったという事が分かる。

「な、何で？」

シヨウタは自問自答する。今自分は、桐条武治の下で罪の清算がされると聞いたはずだ。これ以上苦しむ人の顔を見なくていいはずだ。ソレなのに。

「ああ、説明がまだでしたね。今エルゴ研究所では、タルタロス探索の為に人工ペルソナ使いを開発する研究をしているのですよ」

シヨウタの様子に気づく訳もなく、扉間は気楽に説明する。

「ちなみに、今子供だけを被検体として取り上げているのは、君と桐条グループのご子息が天然ペルソナ使いとしての素養を持つことを発見してね。君達と同年代の子供10

0人を集めて実験しているという訳です」

「罪の清算は……？」

シヨウタは聞いていた話とは違うと、呆然と言葉を繋ぐ。

「ええ勿論。タルタロスを消滅させて、世界の害を無くすためです。ご当主は罪の清算をする為に、この実験を行っているのです」

淡々と話す扉間の話に対して拳を握り、怒りを憎しみを抑えようとする。震える声で只一つはつきりさせておきたい事を聞く。

「あの子達は、……罪じゃないのか」

「ああ、あの子達の事は心配しなくてもいいですよ。被検体は全員親の居ない孤児ですから、世間から居なくなっても桐条グループには害が及ばない。必要な……犠牲です」  
新たな地獄がまた、始まった。

## 十二話 ストレガにおける日常

新たな地獄で始まった生活でのシヨウタを含む被検体の役割は主に2つだった。

一つは単純に人体実験。先代の研究所の残骸に残っていたペルソナ覚醒の錠剤を利用した人工ペルソナ使いだが、不完全な錠剤であった為なのか原因が分からないが被検体の一部は既に自らのペルソナに命を奪われてしまい、研究に関して進展が無いというのが現状であった。被検体の命を最低限配慮するのは、子供を実験に使う過程で良心を痛めたというよりも、調達が困難であるという理由だけである。

その沈滞した状況を打破すべき希望となったのが、状態が安定した形でペルソナを召喚できるシヨウタの存在である。ペルソナ召喚時における脳波測定をする事で、他の人工ペルソナ使いが安定した状態でペルソナを使える事を可能にする召喚機、制御剤を開発していた。

ピツ、ピツ、ピツ、とシヨウタの脳波の音を測定する音が室内に響き渡る。

研究員のほとんどはデータを取ることに夢中になり、無言でコンピュータに見入る。他の人工ペルソナ使いとは比べるまでもない程の安定した数値の測定、素晴らしき、と歓喜に満ちているようでもある。そして、実験が終わると口火を切るかのように

扉間がシヨウタに近づいた。

「いやはや、これ程とは……いいデータが取れましたよ。シヨウタ君」  
「……………」

扉間は眼を輝かせて、シヨウタを褒める。それに対してシヨウタは冷たい視線を投げかけるだけで、無言で返す。

「おや、ゴ機嫌斜めみたいですね。自分から実験に協力したはずなのに」  
「ツ……………」

扉間の言葉に怒りが一瞬湧き上がる。けれど、感情を制御して反論を決してシヨウタは口には出さなかった。

自分が協力している、というのには紛れもない事実なのだから。

そもそもシヨウタが本気になれば、脱走ぐらい簡単に出来るのだ。影時間でなくても召喚機無しでペルソナ召喚できるシヨウタなら、研究員に止める術は無い。銃による攻撃は貫通反射のペルソナで跳ね返せば良い訳だし、研究員ばかり居るこの場所にそれ程腕の立つ達人が居る訳でもない。

そんなシヨウタが未だにエルゴ研究所に留まり、あまつさえストレガで行われている人体実験に協力しているのは、他の人工ペルソナ使いの子供達の存在があった。

桐条鴻悦の実験では、生きるのに必死だったし自分以外の命を気に掛ける余裕もな



かった。その為特段一人生き残ってしまった事に、後ろめたさがある訳ではない。

けれど、……今更他の人工ペルソナ使いを全員見捨てて生き残るなんて出きる筈もなかった。

ヒカルが残した「前を向いて生きろ」という言葉。その意味は今はまだ分からないけれど、見捨てて生き残る事が違うという事が分かる。何故なら自分はヒカルに見捨てられずに助けられたのだから。

研究員がシヨウタのそんな思惑を知らずに上機嫌でデータを取っているのは、使い勝手のいい道具と認識しているからだろう。シヨウタが協力的である為、シヨウタを抑制する処置は幸いにして取られていない。その事を、研究者達は後々後悔することになるのだが。

シヨウタに行われる人体実験の御蔭で実際に余命を縮めかねない代物であるが、制御剤の開発に成功して日々改良が行われているのである。

「さーて。ではそろそろ影時間ですが、……今日は休みますか？」  
「行くよ！僕が行かないと……」

もう一つの役割が、タルタロス探索であった。爆発事故以降残る事になったタルタロスの内部にはシャドウがウヨウヨ出没していてペルソナ使いしか探索する事は出来ない。その為シヨウタを含めて、人工ペルソナ使いである3人を加えた4人パーティで探

索が行われる。

「ゲツ……」

「ほう……」

「……」

3人の人工ペルソナ使いが、シヨウタが訪れるのを見て其々反応を示す。

今日の面子も中々濃い面子である。

「……随分な挨拶だな、今日はヨロシクな。ジン、タカヤ、チドリ」

自分を不審げな目で見る眼鏡を掛けた生え際の厳しい少年である、ジン。

支給された服があるはずなのに、ほとんど上半身が露出している少年である、タカヤ。

感情の起伏の薄い様子でボンヤリと見つめている少女である、チドリ。

と、三人とも一癖も二癖もありそうな面子である。

「フフツ、貴方の力が見られるとは、幸運ですね」

「相変わらずみたいだな、タカヤは」

タカヤは興味深そうな視線を自分に投げかけてくる。シヨウタが目覚めて以降、タルタロス探索で一緒になった際に、ペルソナを見せてからと言うもの関心を寄せてくるのが、タカヤだった。

強力なペルソナを持つ内面は、どんなモノなのか?、と一方的ではあるが気に入られ

ているようである。

「なあ、シヨウタ。チョット聞いてもいいか」

対して自分に対して胡乱な目を向けるジンは、シヨウタを研究員に聞こえない声音で招き寄せる。

「自分、何でこの研究に参加してるん」

「?何でって、研究に参加するしかないだろ」

「せやかて、自分。毎日タルタロス探索に参加してるやろ。何か裏があると思うが普通やないか」

「それは……」

シヨウタは、ジンの向けていた自分への胡散臭い視線の意味を理解する。

自分は、人体実験やタルタロス探索を他の人工ペルソナ使いが死なない為に確かに積極的に参加している。だからこそ、理解できないのだろう。こんな人体実験が行われている地獄で、自分が負荷を掛け続ける事が。そして仮にその理由があるとすれば、それは

「……疑っているのか?」

「仕方ないやろ。正直あのクソ研究員に協力するなんて、正気沙汰やないで」

ジンを始め一部の人工ペルソナ使いとは、距離があるのを感じていた。だが、自分が

疑われていた、とは考えていなかった。シヨウタは茫然とした。

「まあ、ええで。協力しようが、どうだろうが、……頼りになるのは事実やからな」

ジンは、自分の言いたい事は言った、とでもいう風に小聲で話す為に近づいていた状態から離れていく。その背中にシヨウタは、声を掛けようとしてやめた。

(別に、理解されたいわけじゃない)

自分に言い聞かせるように、溜め込んだ感情を制御する。

「……………」

そんなシヨウタの様子を、ボンヤリと無気力な視線を投げるチドリであったがすぐに興味を無くしたのか、視線を外す。チドリのように人体実験という悲惨な現実には、心が折られ無気力になるという症状も人工ペルソナ使用の中に見られる傾向である。

「さあ、皆さん。タルタロス探索、お願いします」

扉間の言葉と共に、シヨウタを含めたジン、タカヤ、チドリなど人工ペルソナ使用はタルタロス探索に駆り出される事になる。

これが、ストレガにおける日常であった。

## 十三話 ストレガの面々

ストレガに居る面子の大体は、シヨウウタや桐条美鶴と同年代の孤児である。

これは、ペルソナ使いである二人が同年代という事もあり、年代がペルソナ覚醒の重要な要素ではないか、とエルゴ研究所が推測した事に基づく。それと同時に親の居ない孤児というのは、社会との関わりが薄い為、居なくなっても分からないという冷徹な判断から最も適な被検体として選出したのである。

7歳から12歳まで様々な子供達が、日々の日常を人体実験とシャドウとの戦いに費やす。その異常な環境は、子供達に様々な影響を与えていた。ペルソナ使いの模擬戦闘場でも様々な反応を持つ者がいる。

「おい、シヨウウタ。オレと戦え」

「……刻か」

左右の色が違うオッドアイが特徴的で、金髪の少年はシヨウウタに対して戦いを挑む。少年の眼には、狂気に近い強さへの渴望が見える。同時にシヨウウタに対する苛立ちがある。

「ああ、弱エ奴が力もないのに足掻くのもムカつくが、テメエみてえに刃向わない奴もム

かつくんだよ。だからテメエを越えなくちやなんねえ」

「……分かった」

「いくぜ!!ペル「やめえや、刻」ブフツ!!」

刻は召喚機に手を掛けて、戦闘態勢に入った所で横から赤毛の少年にぶつ飛ばされる。赤毛の少年はボンヤリとした独特の雰囲気を感じながら、ノンビリと話しかける。

「仲良う。せんとアカンで〜」

「テメエ…ナニをすんだ!!遊騎!!」

刻は倒された体を起こすと、赤毛の少年である遊騎に対してスゴイスピードで突つか

かる。「せやかて、先日のコトを忘れたん?」

「うっ…それは」

遊騎の指摘に対して、刻は言葉を詰まらせる。

先日の事だった。刻がショウタに戦いを仕掛けたのだが、ペルソナの扱いに関してショウタの方に一日の長がありあしらわれていた。実際ショウタは刻に対して碌に傷つける様な攻撃を仕掛けてこなかったのだが、刻はその事に苛立ちペルソナの制御向上の為の戦闘という目的から離れて殴り合いの喧嘩になったのだ。ショウタと刻がまだ、7歳の子供である為殴り合いの威力は無くお互いが傷つく事はなかったが、完全な泥試

合になったのだ。

「問題ねエよ、今回はこの刻様がブチのめすからよ」

「……弱い犬程、よく吠える」

「なんだと!」

刻の勝利宣言に対して、シヨウタはサラリと毒を吐く。が、その言葉には子供らしい負けず嫌いな一面が見え隠れしていた。親しみのないけれど気の置けない悪友。それが二人を表すのに適切な表現だった。

耐え忍ばなければならぬという今の現状において、シヨウタは自分の心を殺さなければならなかった。研究者達に対しては、非道に対する自分の中に渦巻く反抗心を隠し、協力の姿勢を見せなければならない。被検体の仲間達に対しては不信に耐えながらも、接する必要がある。心を殺して接する必要がある状況の中で、純粋な感情を真つ直ぐ向けてくれる相手は貴重だった。そういう意味では、二人は悪友なのだろう。

「落ち着きやゝ二人とも」

「……お前は、お前で変わらない遊騎」

二人の睨み合いも遊騎のノンビリした声に遮られ、喧嘩しそうな状況が霧散する。研究所という環境においても自分のペースを崩すことの無い遊騎の在り方は、何処か異質である。他の人とは、また違う心の強さを持っているのだろうとシヨウタは呆れながら

も声を掛ける。

「チツ・コイツとの戦いがねえんじや。つまんねえヨ」

「まあ、お前みたいに戦闘狂のやつらは少ないしな」

ストレガの模擬戦闘場で周りの子供たちの様子を見ながら、返答を返す。大体の集団の傾向が見て取れる。

大まかに分類してストレガの子供達のグループは三つに分かれる。

一つ目のグループは「無気力組」

エルゴ研究所で行われる人体実験やシャドウとの戦闘に疲れて、現実と向き合うことが出来なくなり、無気力になった子供達である。実際この模擬戦闘場でも、自分のペルソナを磨くわけでもなくただ、ボーっとしている事が多い。チドリやエリナなど、女の子の多くがそのグループにいる。当然タルタロス探索では、シャドウとの戦闘で危機にさらされている事が多いのだがショウタの加入後、タルタロス探索での死者数は一気に減りなんとか生きている、という状態である。

二つ目のグループは「徒党組」

エルゴ研究所内で行われる実験に際し、被検体という同じ状況を体験しているという事で小さな集団を形成して現実に向き合おうという集団である。なぜ徒党組かと言われると、ペルソナ能力についてイマイチ差が生じない為確固たるリーダーが居ないこ



と。そして小さな集団内でのコミュニティを重視する為発展性がないのである。刻の言葉で言う、「金魚のフン」みたいにへばりついて連中と言ったところだろう。主にシヨウウタを疑っている連中は「徒党組」の連中である。内部のグループを重視するが故に排除性が高いという特徴がある。どちらかというところ三つ目のグループに属するといえるが、敢えて言うならジンなどが「徒党組」のメンバーでもある。

そして三つ目のグループは「個性組」

シヤドウとの戦闘を積み重ねて自分の力を高めていく戦闘狂になる者。

エルゴ研究所内に置いて、自分のペースを崩すことの無い者。

人体実験やシヤドウとの戦闘に積極的に参加することで皆を守ろうとする者。

エルゴ研究所の非道を憎み、子供ながらに憎しみを培いながら戦う者。

そして、

「おや、浮かない顔ですね。どうかしましたか」

「……そういうお前は楽しそうだな。タカヤ」

子供とは思えない価値観を持ち、人の心の在り方を楽しむ者。

「ええ、エルゴ研究所という命を削る局面で魂の輝きは素晴らしい。その事は貴方が証明してくれたのですから」

「……本当にお前子供か？」

「貴方よりは年上ですよ」

シヨウタはハア、と疲れた様子で溜息を漏らす。

「個性組」の連中は良くも悪くも自分のペースで動く連中である。協調性は最低限あるが、どいつもコイツも一筋いかない連中だ。全くタチの悪い連中だと思う。

「個性組」のシヨウタが思った所で説得力皆無なわけであるが。

★★★★★★

「……幾月さん、本当にこのプランを勧めるのか」

「うん。幸い被検体の数は足りてるからね。もう少し減らした所で問題ないさ」

エルゴ研究所内でストレガの責任者となっている幾月は、部下に指示を出す。

「分かりました、では扉間にも伝えておきます」

「うん。任せたよ」

部下が部屋の外に出ると、自分の穏やかな仮面を外し狂気に満ちた面相で呟く。

「新世界の生贄は極上でなければね。七人いれば十分さ」